

圓佛教の現況と研究の動向—宗教社会学的視点から—

李 和珍

はじめに

韓国の仏教系の新宗教としては最大の信者規模である圓佛教は、中学、高校、大学の設立などの教育事業や慈善事業、文化事業、社会事業にも熱心な教団である。海外布教にも力を入れて、アメリカ、カナダ、ドイツをはじめ、日本にも支部（教堂）をもっている。同教団についての研究は数多いが、教理面についてなされたものが大部分で、宗教社会学的な視点からのものは、韓国でも日本でもあまりなされていない。

本稿では、まず圓佛教の形成と展開を宗教社会学的な視点から整理する。次に韓国における新宗教研究の中で、圓佛教がどのように位置づけられてきたかを述べる。これを踏まえて、情報時代という現代社会の特質を踏まえた場合に、これから必要とされる圓佛教についての宗教社会学的研究についてつけ加えておくことにする。

1. 圓佛教の概要

1. 圓佛教の歴史

圓佛教の歴史については、圓佛教関係の研究者による多くの研究がある。これらに基き、圓佛教がどのような展開過程をたどったかを最初に確認しておきたい。

圓佛教は1916年に創始者の少太山（ソテサン、朴重彬、1891～1943、現在は「大宗師」と呼ばれる）によって、全羅北道益山市で開教された。教団内の見解によれば、少太山は7歳の頃から宗教的な関心をもった。9歳の頃には人生について真剣な問いを抱いてその後も求道生活を送った。一時期は苦行をした時期もあるとされる。26歳の時、1916年4月28日に大覚を成したとされるが、この日を圓佛教では「大覚節」と呼ぶ。圓佛教教団の開教日となっている。

少太山は、これからの世の中は、物質文明の発達によって精神文明が大きく弱まると予言し、人類の精神文明を導けるような新時代の宗教として圓佛教を開いたとしている。開教時の標語は「物質は開闢される、精神を開闢しよう」であり、この考えのもとに、信心深い9人の弟子⁽¹⁾とともに活動を始めた。干潟の干拓事業と貯蓄組合の設立による資金などで経済的な基盤をつくった。基本経典である『正典』と各種教書などを編纂することで精神的基盤が築かれた。全羅北道益山市に中央総部（圓佛教の聖地）が置かれた1924年に、「仏法研究会」という名で本格的な活動を開始した。少太山が教団の基盤をつくったのは日本統治時代（韓国では日帝時代と呼ぶ）である。戦争が終わる少し前の1943年6月1日に53歳で死去したが、教団では彼の死を涅槃と表現する。圓佛教では開教の年からの年数を「圓紀」としているので、少太山の死去は圓紀28年の事となる。

少太山の死後、圓佛教の法統は一番弟子であった鼎山（チョンサン、宋奎、1900～1962、現在は「宗師」と呼ばれる）に継承された。1945年に日本統治から解放されると教団名を「圓

佛教」と改称した。そして戦災同胞救護事業、ハンゲル普及運動などさまざまな活動を展開するようになった。教育にも力を入れ、46年には機関「唯一学林」を設立して教団内の人材養成を始めた。これがやがて現在の圓光大学校をはじめ、傘下の各種教育機関へと発展していく。

鼎山宗師が1962年に死去した後、3代目を大山(テサン、金大舉、1914～1998)宗師が継いだ。大山宗師は宗教間の協力に関心を示し、1965年12月には圓佛教、仏教、儒教、天道教、カトリック、プロテスタントなどの6宗団からなる「韓国宗教人協議会」を設立した。さらに世界の宗教との協力、団結のための「宗教連合運動」も始め、それとともに海外教化にも力を注ぐようになった。海外への展開を考える上ではこの時期が非常に重要である。1971年には圓佛教開教50周年記念大会を1週間にわたって行い、積極的に教徒や教堂を増やすための活動を展開した。1991年には「少太山生誕100周年聖業奉讃大会」が開かれたが、その時紹介された内容から、活動は建設・学術・奉公・財政・文化広報・行事などにわたっていたことがわかる。学術分野では記念論文集や国際宗教学術会議などを通して、圓佛教の思想を教団の内外に知らせる役を担った。

1994年に4代目を左山(チャサン、李廣淨、1936～2006)宗師が継承した。左山宗師は人材育成、体制整備、経済基盤確立、教書翻訳、放送局設立、国際教化など、多面的な活動に力を注いだ。2006年に5代目を継承したのが現在の耕山(キョンサン、張應哲、1940～)宗法師である。なお現在の指導者は宗法師と呼び、過去の指導者は宗師と呼ぶのが、教団内での決まりである。耕山宗法師は、(教化大仏供、教法人格化、遵法運営、恩拡散、結福100年代)の5大経綸をかかげた。5大経綸は専門用語で分かりづらいが、内容的には大衆的な教化を進め、教師の人格を高め、教えを大切に、社会貢献をして、開教以来100年になる節目を充実させることである。

宗法師は圓佛教の最高指導者である。圓佛教教憲では6年が任期であり、最高決議機関である首位団会の在籍団員のうち、3分の2の賛成を得て選出される。

2. 組織について

以上述べたように、圓佛教は開教以来、代々の指導者が活動を拡充させる方向に務めてきた。その結果、組織はかなり系統立ったものになっている。そこで現在の組織の概要を示しておきたい。図1⁽²⁾は教団ウェブサイトで公開されている教団組織図である。教政院企画室で作成した「2008年教団現況」の教団機構図を簡略化したものである。

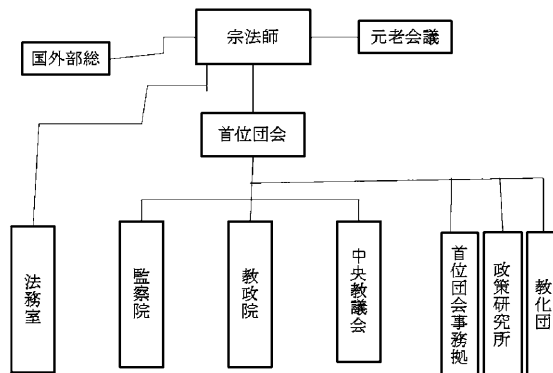


図 1

首位団会とは、首位団の会議体を指す言葉で、教団の最高決議機関で、教団の中心として教団の教化と統治において教団の指導体制をまとめていく機関である。

圓佛教教団には図1でわかるように、監察院と教政院という両院体制に加え、立法機関として中央教議会があり、三権分立体制である。

監察院は中央監察機関である。監察院長1人と監察委員で構成され、監察院事務処で事務を管掌する。教政院は教団行政の中央執行機関で傘下に7部、2室がある。

圓佛教では聖職者を「教務」と呼ぶが、「専務出身」ともいう。教務は定期教育課程を経て、教役者資格試験に合格した者で、出家教役者の名称である。主に教化の使命を持って教堂や関連機関に派遣され、奉職する。教育、行政、慈善、研究、技術、医療などの専門分野に奉仕する「道務」、勤労と機能などの分野に奉公する「徳務」もいる。一定の年限と実績によって「教監」（教区長を指す）、「教領」になる。

3. 教理と修行、儀式

ここでは、信仰の対象、教典などの教理に関するもの、年間を通しての儀式、修行の種類とその方法などについてまとめておく。

圓佛教の信仰の対象は「一圓相（イルウォンサン）」で「法身佛一圓相」ともいい、「○」で象徴される。少太山が宇宙の真理を悟った後、その象徴として表現したものである⁽³⁾。「一圓相」の前で、坐禅・心告・祈祷などの修行、すべての行事などが行われる。一圓相の真理へ向かう方法には、真空妙有の修行門と因果応報の信仰門がある。また三学・八条と無時禅・無処禅の修行を通して一圓相の真理に到達でき、四恩・四要と処処仏像・事事仏供の信仰を通して一圓相の真理へ入ることができる。信仰門と修行門は一圓相の両面性を説明するもので、一圓相の真理は信仰の対象であり、修行の手本になるものである。

そうした圓佛教の教理をまとめた基本経典が『圓佛教教典』である。第1部が「正典」、第2部が「大宗経」となっている⁽⁴⁾。「正典」は、少太山が著述したもので思想と経綸が書かれているもので、「元経」ともいう。正典は次の3つからなる。

- ①開教の動機と目的、教法の精神と綱領が記録されている「総序編」。
- ②教理が一圓相を中心に具体的に説明されている「教義編」（一圓相・四恩・四要・三学・八条・人生の要道と勉強の要道・四大綱領⁽⁵⁾）。
- ③真理の世界・教理の世界へ近づける方法を示している「修行編」（日常修行の要法・定期訓練と日常訓練・念仏法・坐禅法・疑頭要目・日記法・無時禅法・懺悔文・心告と祈祷・仏供法・戒文・率性要論・最初の法語・苦楽に対する法文・病める社会とその治療法・霊肉双全法・法位等級）。

第2部の「大宗経」は、少太山の言行を記録した基本経典で、一番弟子にあたえた法門で全部で15品⁽⁶⁾がある。一圓相の真理を実践するための指針書で「通経」ともいう。

『圓佛教教典』と佛祖要経⁽⁷⁾、礼典、鼎山宗師法語（世典、法語）、圓佛教教史、圓佛教聖歌をまとめたのが『圓佛教全書』である。インターネット上の経典・法門集には圓佛教教憲、大宗経選外録（22章）、ハンウルアンハンイチ（1つの棒1つの理という意味で、法門と逸話、平常心で構成）、大山宗師法門集（1輯～5輯）などがある。

圓佛教の修行については、「正典」の「修行編」に詳しく説明されており、日常修行の要法・定期訓練と日常訓練・念仏法・坐禅法・疑頭要目・日記法・無時禅法・懺悔文・

心告と祈祷・仏供法・戒文・率性要論・最初の法語・苦楽に対する法文・病める社会とその治療法・霊肉双全法・法位等級の17章がある。

こうした教理をふまえた圓佛教教徒の日課はどうなっているのでしょうか。まず朝の修養は、朝の心告をし、10分以上の坐禅、1ページ以上経典を奉読する。昼の報恩・努力は、すべての仕事に対して感謝の心を持ち、準備をし、取捨をし、誠実に報恩する。夜の懺悔では、一日の事を反省し（修行日記）、懺悔と誓願の心告をする。このような修行生活において、読経文として常に用いられるのが「一圓相誓願文」である。1938年に少太山がつくった経文で306字の短い内容であるが、一圓相の真理、四恩、三学、因果の理など圓佛教の基本教理が集約されている。一圓相誓願文は朝晩、あるいは一日何回も読経され、教団の各種の儀式行事の際にも読経文として使用されている。



図2

以上の圓佛教の教理・修行は、教理図（図2）として示されている。教理図は少太山が基本教理を分かりやすく、実践しやすくするために図式として表現したものである。教理図について、少太山は「亀のような形をしている。これは末永く伝わる萬古の大法である。私の法の真髓がすべてここにある。この通りに修行すれば、貧富貴賤・有無識・老若男女を問わず、成仏できない人はいないだろう」と語ったという。教理図を亀の形にしたのは東洋の伝統思想に基づいたもので、圓佛教の教法が亀のように数万年間ずっと長く伝わるだろうということの意味する。

次に圓佛教の儀式についてであるが、まず教団の年間の主な行事には「四祝二斎」がある。「四祝」は慶祝日で新正節、大覚開教節、釈尊生誕節、法認節である。新正節は、1月1日に

新年を祝い、新年の計画や希望を祈願する。大覚開教節は、4月28日に行われるが、少太山の覚と圓佛教の開教を毎年慶祝する全教徒の共同誕生日である。釈尊生誕節は4月8日(旧暦)の釈迦の誕生を記念する日である。法認節は、8月21日に9人の弟子の白指血印⁽⁸⁾の祈祷による法認成事を記念する日で、圓佛教の創立精神を表し、法界の認定を得たことを祝う。

「二斎」は大斎ともいい、六・一大斎と名節大斎を指す。六・一大斎が行われる6月1日は少太山の涅槃日を合同で追悼する日で、歴代諸仏諸聖及び父母・先祖・一切生霊を追慕するための儀礼(「享礼」と呼ばれる)である。名節大斎は12月1日に行われるすべての聖賢、父母、先祖、一切の生霊を追慕する享礼である。

圓佛教では圓佛教信仰を信じることを決意して「入教」の正式な手続きを経て、圓佛教の名前(法名)を貰った人は「教徒」になる。正式な手続きを経ていない人は「信徒」という。その差は権利と義務の行いにある。圓佛教教徒は、「教堂」と呼ばれる教徒たちが集合して各種の宗教生活をする場所に、毎日曜に集まり、「法会」を行う。教堂には「教務」と呼ばれる人物が常住して管理し、教務が法会を進行させる。法会はその性格によって、学生法会、青年法会、子ども法会、水曜夜会、月曜法会などがある。

4. 教団施設及び関連事業

ここでは教団施設と関連事業などについて紹介する。圓佛教には中央総部を中心にし、全国に多くの教堂と関連機関があるが、創立初期から修養集団というより社会に貢献できる宗教団体を目標とし、事業目標を教化・教育・慈善と決めた。この三大事業を中心に教団施設と関連事業が展開されてきた。現在は教化・教育・福祉・文化の4つに分類されている。それぞれの内容のあらましを、教団ウェブサイトに掲載された記述を参照してまとめておく。

教化事業は、国内全国の教区と教堂の他、国外の複数の教堂でも行われている。また教化団及び法会活動、宗教協力運動参与、軍宗教化活動、心の勉強会運営(サイバー)、サムドン青少年会運営(サイバー)、教政教化活動(刑務所、少年院)があり、5ヶ所の聖地⁽⁹⁾でも行われている。聖地について簡単に説明しておく。

- ① 靈山聖地(全羅南道靈光郡)は少太山が生まれ、求道の苦行を通して真理を悟り、教化を始めた圓佛教の発祥地である。聖地施設と靈山圓佛教大学校がある。
- ② 邊山聖地(全羅北道扶安郡)は少太山が教法を制定した蓬萊精舎(蓬萊山にある教法を制定した家)の近辺で「制法聖地」ともいう。邊山聖地の守護と管理を担当する邊山圓光禪院とハドの海上訓練院がある。
- ③ 益山聖地(全羅北道益山市)は圓佛教の中央総部がある「伝法聖地」であり、「総部聖地」ともいう。少太山が総部を立て、18年間の教化活動をし、涅槃にいたったところである。いわば教団の心臓部であり、大覚殿、大宗師聖塔、聖碑、永慕殿、圓佛教歴史博物館、元老院、修道院などがある。
- ④ 萬徳山聖地は(全羅北道鎭安郡)1924年の「仏法研究会」創立総会以後、萬徳庵で圓佛教最初の夏禪(非公式)を行った(萬徳山初禪会)場所である。現在は萬徳山訓練院がある。
- ⑤ 星州聖地(慶尚北道星州郡)は2代宗法師である鼎山宗師の誕生地で、求道を行った聖地である。

教育事業として、圓光大学校、圓光保健大学校、圓光デジタル大学校を運営しており、圓

佛教の教役者養成のための靈山禪学大学校、圓光大学校の圓佛教学科、圓佛教大学院大学校、米州禪学大学院大学校がある。圓光高等学校のほか6校の中・高校、また靈山聖地高校、ハンギョレ中・高校のほか、6つの各種学校（韓国で「代案学校」とよばれるもの）や幼児教育機関を140ヶ所運営している。

福祉においては、疎外され、生活の困難な人々のための社会福祉事業展開、教団の元老のための静養施設運営、老人、障害者、保育、総合福祉施設100余ヶ所運営、圓光大学校病院をはじめとする総合病院、漢方病院など20余ヶ所の医療機関運営。ウンヘシムキ（恩を植える）運動本部と圓佛教奉公会を中心とする分け合う運動などを実践している。

文化事業として、FM圓音放送、漢方健康TV（衛星、ケーブル放送）、圓佛教TVを運営している。教典の刊行や定期刊行物としては圓佛教新聞（週刊）⁽¹⁰⁾、月刊圓光（雑誌）⁽¹¹⁾の発行がなされている。（社）圓佛教文化芸術人総連合会の活動、全国圓音合奏祭、圓佛教美術祭なども開催されている。

韓国には軍隊に軍宗（軍隊内の宗教関連兵科）として、仏教、カトリック、プロテスタントがあるが、2006年に圓佛教が兵制編入の対象宗教として指定され、2007年6月に第1号の軍宗将教の任官式が行われ、2011年6月に第2号の軍宗将教が任官されるなど、圓佛教の将兵の信仰と修行を指導する⁽¹²⁾。圓佛教が韓国の軍隊の4大宗教になっている。

5. 日本を含む圓佛教の現況

圓佛教の活動、教団の教徒数、教堂数、機関数などは圓佛教の公式ウェブサイトの「2008年教団現況」に示されている。

現在の教徒数は、27万1,705名（海外4,248名含む）である。これに対し、韓国の統計庁で10年毎に実施する「国民住宅総調査」によると、2005年に12万9,907名で、同調査の1995年の8万6,823名より増加している⁽¹³⁾。2つの数値を比較すると、教団で発表している教徒数は統計庁調査の2倍である。

教団現況によると、国内に16教区505ヶ所の教堂、機関教堂31、機関137がある。国外にはヨーロッパ、米州東部、米州西部、日本、中国の5教区と20ヶ国の65ヶ所の教堂がある。アメリカ、日本、カナダ、ドイツ、南アフリカなどに100名以上の教役者を派遣しており、米州禪学大学院などでは、海外教徒の教育と訓練を行っている。

日本には70年代に大阪を中心に布教を始めたが、現在は横浜、東京にも教堂がある。東京教堂は90年代に錦糸町を拠点に活動を始めたが、2006年5月に葛飾区金町に移転した。そのおりに、日本教区庁・東京教堂の奉仏式を行い、本格的な教化活動を開始している。東京教堂には「圓佛教東京教堂韓国文化センター」という看板が掲げられている。

この東京教堂には、奉仏式の式典をはじめ、法会や行事など数回にわたって訪問し、面談調査や参与観察を行ってきている。その調査結果については別途扱う予定であるが、ここでは、日本での活動状況を補足する意味で、現在の活動状況の概略のみを示しておく。東京教堂では第2・第4目の日曜日に法会があるが、在日韓国人とその配偶者、韓国から来た圓佛教教徒の留学生が主な参加者であり、日本人の信者・教徒は少ない。韓国語講座が週3回ほどあり、10人前後の日本人が参加する韓国文化教室が開かれている。韓国語講座を通して圓佛教を知ってもらい、教徒になるケースも少数ながら、あるという。現在まで常住教務の交代が3回ほどあった。現在は日本留学の経験のある教務がいるため、必要に応じては日本語

での法会も可能な状況である。

圓佛教のウェブサイトには「ウォンマウル（圓村）」というコンテンツがあって、所属・性格・会員の対象によってそれぞれの集いのサイトをつくることができる。東京教堂もウォンマウルを2008年に作成して、現在71名の会員が加入している⁽¹⁴⁾。圓佛教のウェブサイトのIDを持っていて東京教堂について関心のある人なら誰でも加入することができる。

II. 圓佛教の宗教社会学的研究

1. 韓国新宗教の中における圓佛教の位置づけ

圓佛教は韓国の新宗教の一つだが、韓国の新宗教研究においては、圓佛教をどう分類するかは研究者によって異なる。新宗教は教義上の特徴などによる系統別の分類が一般的である。また実態調査の結果からみると活動している団体の数は350以上である。

韓国新宗教の研究は1910年代から始まったが、村山智順『朝鮮の類似宗教』（朝鮮総督部、1935）が戦前の研究としてつねに参照される。

戦後、60～70年代から民族宗教に関する研究が活発に展開し始める。韓国民族宗教を研究する目的で設立された研究所がいくつかある。1962年李康五の韓国新興宗教研究所、1967年柳炳徳の宗教問題研究所、1970年に卓明煥の韓国宗教問題研究所、1977年のイ・キョンウのセ（新）宗教研究院である。

1980年代には70年代の研究をふまえ、韓国社会で「民衆」「民族」が強調される時代を背景に、民族宗教に対する研究でも社会変革思想や民衆思想に関心度が高くなった。

90年代には、民族宗教思想に基いて女性・統一・倫理・環境などの社会問題に対する対案を提示した研究や韓中日の比較研究などが注目される。

こうした韓国の新宗教研究においては、圓佛教はどう位置づけられているのであろうか。主な研究における圓佛教の区分名を示してみる。

- ・村山智順『朝鮮の類似宗教』（朝鮮総督部、1935）：（戦前は仏法研究会という名称）「仏教系類似宗教」
- ・文化広報部『韓国新興及び類似宗教実態調査報告書』（1970）：「仏教系新興民族宗教」
- ・ソウル大学校宗教学科宗教文化研究室『転換期の韓国宗教』（ジプムン堂、1986）：「韓国自生宗教」
- ・卓明煥『韓国新興宗教の実像』（国際宗教問題研究所、1991）：「純粋な韓国産仏教団体」
- ・韓国民族宗教協議会『韓国民族宗教総覧』（1992）：「韓国で自生した民族宗教」
- ・李康五『韓国新興宗教総監』（韓国新興宗教研究所、1992）：「系統不明の仏教教団」
- ・柳炳徳・金洪喆・梁銀容『韓・中・日三国新宗教実態の比較研究』（圓光大学校の宗教問題研究所、1992）：「韓国開創の新宗教」
- ・韓国精神文化研究院『現代韓国宗教変動研究』（1993）：「民族宗教」
- ・韓国宗教研究会編『韓国新宗教調査研究報告書』（1996）：「仏教系新宗教」
- ・柳炳徳・金洪喆・梁銀容『韓国新宗教実態調査報告書』（圓光大学校の宗教問題研究所、1997）：「韓国自生新宗教」
- ・韓国宗教研究会『韓国宗教文化史講義』（図書出版青年社、1998）：「日本統治時期の仏教系新宗教」
- ・チェ・ジュンシク『韓国の宗教、文化で読む2 道教・東学・新宗教』（サゲジヨル出版

社、2003)：「韓国自生新宗教」⁽¹⁵⁾

これをみると、圓佛教関係者である柳炳徳他の2つの書籍の分類の仕方から分かるように、圓佛教は自分の教団が「自生宗教」、つまり土着の宗教であることを強調し、仏教系新宗教としては分類していないことになる。

しかし、日本の新宗教研究における区分法を参照すると、仏教系の新宗教としてみなしてさしつかえない。その形成過程や教義に仏教的な要素が強くみられるからである。

以上のように、圓佛教は時代ごとに韓国自生新宗教、民族宗教、仏教系新宗教などと分類され、位置づけられているが、学者によって新宗教についての定義や分類法が実に多様であることも分かる。この点は日本における新宗教研究とは大きく異なる。むしろ圓佛教独自の教理や儀礼があるが、圓佛教にもっとも大きく影響を及ぼしているのは仏教である。実際の法会の様子からでも、坐禅や木魚による読経、般若波羅密多心経・金剛教を唱えるなど仏教の要素が多い。圓佛教を仏教系新宗教とすると、その中では現在韓国最大の信者数を擁し、社会的な影響ももっとも大きい。圓佛教の形成と展開過程を検討することは、近現代の韓国社会で仏教から影響を受けた新しい教団がどのような形で社会に発言し、行動したのかを探るうえで重要であると考えられる。

2. 圓佛教についての先行研究と分析

これらを含め、圓佛教の先行研究においては、圓佛教に対してどのような面に焦点があてられ、どのような特徴づけがなされてきたのであろうか。当然ながら、教団内からの研究と教団外からの研究では、重視するところが異なるので、大きく教団内のものと教団外のものに分けて示したい。

まず、教団内の研究について述べる。圓佛教教団は、教育事業として学校や研究所などの教育・研究機関があり、そうした機関における研究が、圓佛教研究の大半を占めている。具体的には、圓光大学の修士・博士論文、圓光大学校宗教問題研究所、圓佛教思想研究院、教団出版社の論文集、学術誌、学会誌などである。

学術誌としては、次に4つである。

- ①『圓佛教文化論叢』第1輯～第9輯(2007)(一圓文化研究財団)。
- ②『圓佛教学』第1輯(1996.2.25)～第9輯(2003.6.30)(韓国圓佛教学会)。
- ③『圓佛教学研究』1972年～80年まで発刊(圓光大学校圓佛教研究班)。
- ④『圓佛教思想』第1輯(1975)～第26輯(2002)(圓光大学校圓佛教思想研究院)。

※第27輯(2004)から『圓佛教思想』が『圓佛教思想と宗教文化』と変わり、2011年6月までで第48輯(圓佛教思想研究院・韓国圓佛教学会)になる。

上記のうち、『圓佛教学』と『圓佛教思想と宗教文化』はタイトルがすべて確認することができたので、それを参照してそのおおまかな傾向を示す。

まず『圓佛教学』は韓国圓佛教学会による学術論文集であり、特集と研究論文からなる。

特集として組まれているテーマとして、第1輯は「圓佛教学研究の現況と課題」「圓佛教信仰論の課題」など、第3輯は鼎山宗師誕生百周年記念'97秋季学術大会(宋鼎山の『建国論』)、第5～7輯は未来社会と宗教(Religions in Our Future Society)、第8輯は統一時代と圓佛教の展望、伝統思想と現代化と鼎山宗師である。

研究論文はどのようなテーマを扱っているであろうか。第1輯には、一圓相信仰の初期形

成過程の研究、圓佛教の社会倫理の儒教的接近、圓佛教の社会奉仕組織の特性研究、圓佛教研究の新科学的な試み、死に対する意識研究などの論文がある。第2輯には、圓佛教禅修行の特徴、少太山の神明思想、圓佛教の生命思想のほか「中国精神文明建設と圓佛教の精神開關思想」「韓国カトリック事例からみた圓佛教の社会奉仕」という比較研究がある。

第3輯には、「仏教と圓佛教との関係」や「解放後仏法研究会のパンフレットに関する研究」、また第4輯には、圓佛教思想と現代社会、鼎山思想の展開、東洋思想と圓佛教の三つのテーマによる論文などがある。第6輯には、「21世紀圓佛教の課題と方向」「圓佛教宗教儀礼からみた象徴体系」「圓佛教の死観の一考」「圓佛教社会事業の省察と課題に関する研究」があり、第8輯には「圓佛教研究の最近動向と課題」「圓佛教思想に基づく21世紀老人福祉の方向」「圓佛教教典」から見た圓佛教の障碍人観などがある。そして第9輯には、「21世紀道徳教育の方向」「知識情報社会と青少年修練活動の活性化法案」「圓佛教サイバー教化の方向性模索」「圓佛教学研究の当面課題」などの論文がある。

以上のように研究論文としては教団の教学、思想と教団の未来に対する課題や方向性についての研究が主であることが分かる。

次に『圓佛教思想と宗教文化』に掲載された研究論文をみると、大きく3つに分類することができる。

- ①創始者の少太山大宗師と2代目の鼎山宗師の思想、意識、宗教観、人間観、建国観などに関する論文。
- ②圓佛教教団の開教過程・成立史や現況、思想、未来観、儀礼、修行、福祉、社会参与活動、医療と宗教文化、社会事業、青少年・児童教育、教堂・教化方法論、宗立大学の教化方向、「院報」（圓佛教思想研究院）についての分析、宗教連合運動など。
- ③比較研究としては、韓国伝統思想と圓佛教、仏教・儒教・道教との交渉、民族儀礼と圓佛教儀礼、韓・中・日三国の新宗教運動の性向など。

ちなみに韓国の国会図書館で「圓佛教」で論文検索すると、2,000件以上がヒットしたが(2011年8月)、そのほとんどが圓佛教教団関連の大学校・大学院の修士・博士学位論文及び上記で触れた論文などである⁽¹⁶⁾。この論文の中には若干ながら宗教社会学的な観点からのものが含まれているようだが、現時点では論文の収集が十分ではないので、これらの論文に関する分析は別稿において行いたい。

同じく図書類は200件ほどヒットした。教団関連の出版局で出版されたものの割合が高いが、これを教団内と教団内に分けて簡単に紹介する。

教団関連出版は、圓光大学校出版部、靈山圓佛教大学校出版局、月刊圓光社、圓佛教出版社、圓佛教教化研究会、圓佛教中央総部、圓佛教新聞社などによって出版されたものが主である。ほとんどが教理・思想などに関するものである。

圓光大学校出版局では、『圓佛教事典』（1974）、『圓佛教と東洋思想』（柳聖泰著、1995）、『少太山と圓佛教思想』（柳炳徳著、1995）、『圓佛教教化論』（除慶田著、1989）、『一圓相真理の諸研究』（圓佛教思想研究院編、1989）など。

靈山圓佛教大学校出版局では、『青少年の心理理解と相談』（少太山思想研究院編、1998）、『青少年アイデア：現代社会と青少年の諸問題』（少太山思想研究院、1997）、『宗教的靈性フェミニズムとエコフェミニズム』（ハ・チョンナム著、1999）、『女性未来：生命共同体』（女性問題研究所、1997）。

月刊圓光社では『心の養殖：教務74人説法集め』（圓光編輯室、1989）、『真理は一つ、世界も一つ：大山宗法師法坐30年』（月刊「圓光」編集室、1992）など。

圓佛敎出版社では、『圓佛敎全書』（圓佛敎正化社、2002）、『圓佛敎敎典・聖歌』（圓佛敎正化社、1992）、『楽園の家庭を作る道』（圓佛敎法務室編、2008）、『圓佛敎の人はどんな人たちであるか』（柳聖泰著、2002）、『環境倫理と圓佛敎の恩思想』（姜ソンキョン著、2001）、『坐禅法』（呉光益編、1990）、『圓佛敎理解の第一歩』（金イルサン、2001）など。

圓佛敎思想研究院では、『圓佛敎の人物と思想』（圓佛敎思想編纂委員会編、2001）、『圓佛敎と21世紀』（2002）。圓佛敎新聞社では、『左山宗法師法門集』（左山宗法師、2005）。

圓佛敎敎化研究会『韓国近代史から見た圓佛敎』（圓光、1991）には、民族運動、儒敎思想の受容に関する研究、一圓相の道敎的考察、甌山との出会い、教育思想と展開について述べている。

柳炳徳・金洪喆・梁銀容『韓・中・日三国新宗教実態の比較研究』（圓光大学校の宗教問題研究所、1992）には、圓佛敎についての概要が簡単に紹介されている。

圓佛敎学敎材研究会編『宗教と圓佛敎』（圓光大学校出版局、2003）には、圓佛敎の歴史と思想、現代社会と圓佛敎（平等社会への道、韓半道の平和統一と圓佛敎、圓佛敎の儀礼文化、環境問題と圓佛敎など）。

敎団外の書籍については、I-1.の「韓国新宗教の中における圓佛敎の位置づけ」で紹介した書籍などが主なものであるが、それらの大半は新宗教全体を紹介する中に圓佛敎にも短くふれるだけのものがある。ただ、チャ・オクスンとチェ・ジュンシクによるものは圓佛敎を主たる対象とした書である。チャ・オクスン『韓国人の宗教経験 甌山敎・圓佛敎』（ソクァン社、2003）は、少太山の社会・思想的背景や一圓相の真理についてまとめており、チャ氏が直接面談を通して採録した体験談が中心に紹介されている。チェ・ジュンシク『韓国の宗教、文化で読む3 甌山敎・圓佛敎』（サゲジヨル出版社、2004）では、圓佛敎を「韓国型仏敎の誕生」と形容しており、少太山の人格、敎団の形成過程、圓佛敎の思想、圓佛敎の現況と問題について述べている。

ほかに短いながら圓佛敎の特徴を他の宗教と比較して述べたものに金洪喆「水雲 甌山少太山の儒・仏・仙 三敎観」、『韓国宗教』4・5（圓光大宗教問題研究所、1980）、柳炳徳『韓国思想と圓佛敎』（キョムン社、1989）、韓国宗教研究会『韓国宗教文化史講義』（図書出版青年社、1998）、キム・ソンレ他『韓国宗教文化研究100年』（図書出版青年社、1999）、キム・スンヘ他『韓国の新宗教とキリスト敎』（バオロタル、2002）など多数ある。

チャとチェによる2書とその他の圓佛敎が簡単にふれられた図書において圓佛敎がどう扱われているかをみると、次の3つの点がある。

- ①韓国の新宗教の中の1つとして分類し、全体的特徴を説明する。
- ②敎団史を記述したうえで敎理、信仰の真理、聖典、儀式、修行、組織について述べる。
- ③他の類似の新宗教との比較研究。主に水雲・甌山と少太山との思想の比較など。

3. 宗教社会学的視点

韓国の新宗教について宗教社会学的視点から研究が始まったのは、盧吉明「新興宗教発生の社会学的意味」（『新生命』、1975）、「新興宗教組織体形成の背景に関する研究」（『人間と未来』、1976）である。しかし、圓佛敎についての宗教社会学的研究は、以上の論文や書籍

などから見てわかるようにまだ少ない。

その中でも宗教社会学視点を導入して研究をしている学者としては、柳聖泰、韓乃昌の二人をあげることができる。二人とも圓光大学校圓佛教学科教授である。柳聖泰は「知識情報社会と教役者像」(『圓佛教学』第9巻、2003)などで、圓佛教の教務論を21世紀知識情報化社会と連関させており、特にインターネット教化に焦点を当てている。『21世紀の価値と圓佛教』(東南風、2000)、『知識社会と聖職者』(圓光大学校出版局、1999)、『競争社会と圓佛教』(圓光大学校出版局、1998)などの著書もあり、社会と圓佛教との関係、教団がどのような対応をしていくのかなどを提示している。

韓乃昌は「圓佛教教堂教化の実態分析」(『圓佛教思想』第21輯、1997)で、教化現場における教務を中心としたアンケート調査を通して、教化の状況把握、どのような要因が教化の状況に対する認識度と関わっているかなどを分析している。

また「宗教性が青少年の親社会的行動に及ぼす影響」(『圓佛教思想』第24輯、2000)ではアンケート調査・現場調査を行い、その結果を分析している。宗教は個人の倫理感覚で形成されているのかという仮説に、青少年は周辺の宗教的ネットワークによって宗教を選択しているという。佛教の学生を除いて、家族内の宗教一致度は70～80%を超えていることがわかり、青少年の宗教の選択は自分の意思より親のような1次集団の宗教的ネットワークによって決まるということが分かったという。

圓佛教についての宗教社会的視点からの研究が少ないので、筆者は圓佛教教徒を対象として2007年～08年に意識調査を実施した。1,200部以上の結果を得て、その結果を論文としてまとめた。「新宗教の先祖祭祀の日韓比較—妙智會と圓佛教の事例を中心に—」(『國學院大學研究開発推進機構紀要』第2号、2010年3月)と、「圓佛教教徒の意識調査—アンケート調査の分析を中心に—」(『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』第3号、2010年9月)である。また、圓佛教のウェブサイトの情報発信の特徴については「韓国新宗教のウェブによる情報発信—圓佛教を中心に—」(『ラク便り』第39号、2008年8月)に紹介している。

教徒へのアンケートと面談調査、教団ウェブサイトの分析はいずれも基本的に社会学的な視点によるものである。今回紹介した先行文献の多くは教団側の自己理解、理念など、教団のあるべき目標などを示したものである。教団活動についての現況と課題などを示している研究もあったが、実際の活動の展開はどうであるか、教徒たちはどう考え、どの程度実践しているかなどについては宗教社会学研究によるものによって確認する必要がある。

筆者が行ったアンケート調査とここで述べた文献で示されている内容を比較したときに、興味深く感じられた点を二、三述べておきたい。それは宗教連合活動や社会奉仕運動の教団行事についての教徒の認知度である。教団の社会活動においては5代目の宗法師になってから力を入れているが、筆者のアンケートで「圓佛教が推進している社会奉仕活動(恩作る運動、奉公会、女性会)などについて1つだけ選んでください」と質問した結果では次のような回答結果となった。「知っていて、活動にも積極的」23.4%、「知っているが、あまり活動には参加しない」55.4%、「聞いたことがあるが、詳しくは知らない」20.5%。これを見ると、半数以上があまり活動しておらず、2割は活動そのものについてもよく認知していないということが分かる。

教団は国際教化にも力を入れているとしているが、アンケートでは「圓佛教は海外に向け

での活動をしているが、海外布教についてどう思いますか。1つ選んでください」と聞いた。その結果を見てみると、回答は、「海外にも多くの教堂ができてほしい」72.9%、「日本などアジアの近い国に教堂ができてほしい」24.9%、「海外支部は特に要らないと思う」1.8%となった。教団の国際的な活動に対しては、全体的には好ましいと考えていることが分かった。国際教化に関しては、その意義が教徒たちにも共有されているとみなしていいだろう。

圓佛教のウェブサイトに関しては、非常に充実していて、情報は豊富なのであるが、アンケート結果から教徒の受け止め方を見ると次のとおりである。「インターネット上に圓佛教のホームページがあることを知っていますか」と質問した結果は、「はい」88.1%、「いいえ」11.7%となり、関心度は高いことが分かる。しかし、この質問のサブクエスチョンで、①「圓佛教ホームページについてどう思いますか」、②「圓佛教ホームページに求める情報は次のうちどれですか」と質問した結果は次のようになった。①については「充分」40.9%、「まあまあ」38.7%、「不十分」8.9%であった。

②については、多い順に「教団の紹介や活動内容をもっと充実させてほしい」32.5%、「教堂別やウォンマウル別の情報交換が可能な場を増やしてほしい」22.3%、「総部の行事様子を動画で掲載してほしい」20.6%、「教団の行事やお知らせなどを詳しく記載してほしい」15.7%、などとなった。ウェブサイトは体系的に作成されているので、教徒たちも実際にある程度利用し、信者同志の連絡手段としても機能していることが分かる。たださらに充実させて欲しいという回答もあるので、比較的充実しているウェブサイトでも、現代の信徒たちからすれば、改善を求めたいという意見も少なくない。情報時代の急速な進行を考えると、この結果は当然に思える。

まとめに

以上、述べたように圓佛教関係者による研究は、教団の歴史や教理・儀式、創始者・指導者が目指す思想・教団の方針、教団の歴史展開については細かい分析がなされている。組織についてもウェブ上で詳しく公開されているため、教団についての情報を部外者もかなりの程度、知ることができる。しかし、それを教徒や社会側がどう受け止め、どう実践されているのか、理念と実際の状況にはズレがあることなどを探るためには、さらに社会学的な調査を重ねなければならない。

今回の文献調査で、宗教社会学的視点からの研究は少ないことが明らかとなり、日本の新宗教研究と比較しても分析の視点は多様ではない。圓佛教は韓国で4大宗団として数えられており、日本でも韓国の新宗教を扱う場合には、必ず言及されるような教団であるので、実態調査による基礎データの収集をさらに続けていくことが求められている。

今後は、圓佛教の宗教社会学的研究として、世代間の意識の差、実践における地域差、新しい活動形態などを調べることによって、戦前の日本統治時代に形成された新宗教が、情報化など新しい社会変化の局面の中で、どのような対応をしようとしているかを調べていきたい。その際は、同じようなタイプの日本の新宗教が示している変容のあり方との比較が有効であると考えている。すでに妙智會教団との比較研究に着手しているが、そうした研究を深めていきたい。情報化が宗教に与える影響は日本でも韓国でも同じような面が多いと思われるので、信者の側からの視点を重視することで、その影響についてさらに考察を加えたい。

参考文献

- ・イ・ソンテク『新時代の宗教：教理図を通してみた圓佛教』ソプリ、2003年。
- ・圓佛教『圓佛教経典<正典・大宗経>』圓佛教中央本部、1975年。
- ・圓佛教学教材研究会『圓佛教学概論』圓光大出版局、1983年。
- ・圓佛教教政院教化訓練部『新お釈迦様（少太山朴重彬大宗師の生涯）』教化訓練部編修委員会、2001年。
- ・韓国宗教研究会『韓国宗教文化史講義』図書出版青年社、1998年。
- ・キム・ソンレ他『韓国宗教文化研究100年』図書出版青年社、1999年。
- ・キム・イルサン『圓佛理解の第一歩』圓佛教出版社、2001年。
- ・キム・スンヘ他『韓国の新宗教とキリスト教』バオロタル、2002年。
- ・キム・ホンチョル『圓佛教思想論考』圓光大学出版局、1980年。
- ・ソウル大学校宗教学科宗教文化研究室『転換期の韓国宗教』ジプムン堂、1986年。
- ・チャ・オクスン『韓国人の宗教経験 甌山教・圓佛教』ソクァン社、2003年。
- ・チャ・ヨンジュン『伝統文化の理解5 韓国の新宗教文化編』全州大学校出版部、2001年。
- ・チェ・ジュンシク『韓国の宗教、文化で読む2 道教・東学・新宗教』サゲジョル出版社、2003年。
- ・チェ・ジュンシク『韓国の宗教、文化で読む3 甌山教・圓佛教』サゲジョル出版社、2004年。
- ・崔東熙・柳炳徳共著『韓国宗教思想史Ⅲ 天道教・圓佛教編』延世大学校出版部、1999年。
- ・卓明煥『韓国新興宗教の実像』国際宗教問題研究所、1991年。
- ・柳炳徳『韓国思想と圓佛教』キョムン社、1989年。
- ・李和珍「韓国新宗教のウェブによる情報発信－圓佛教を中心に－」『ラク便り』第39号、2008年。
- ・李和珍「新宗教の先祖祭祀の日韓比較－妙智曾と圓佛教の事例を中心に－」『國學院大學研究開発推進機構紀要』第2号、2010年。
- ・李和珍「圓佛教教徒の意識調査－アンケート調査の分析を中心に－」『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』第3号、2010年。

注

- (1) 圓佛教では入教した教徒には俗世の名を捨て、圓佛教人として生まれ変わるという意味で法名をつけ、入教式を行う。初めて法名がつけられたのがこの9人の弟子である。団長が少太山（朴重彬大宗師）、中央団員が鼎山（宋奎）、団員が一山（李載喆）、二山（李旬旬）、三山（金幾千）、四山（呉昌建）、五山（朴世喆）、六山（朴東局）、七山（柳中）、八山（金光旋）。圓佛教教政院教化訓練部『新お釈迦様（少太山朴重彬大宗師の生涯）』教化訓練部編修委員会、2001。
- (2) 教団公式サイト <http://www.won.or.kr/index.jsp> の「圓佛教案内」という項目にある「圓佛教の現況」には「圓紀93年（2008）統計」という名のファイルがあり、ダウンロードできるようになっている。そのファイルが「2008年教団現況」である。
- (3) 日本語版『圓佛教教典<正典・大宗経>』（圓佛教中央本部、1975）には、一圓相の真理について「一圓相は、宇宙万有の本源であり、諸仏諸聖の心印であり、一切衆生の本源であり、大小有無に分別のない境地であり、生滅去来に変化のない境地であり、善悪業報の絶えた境地であり、言語有相の頓空なる境地である。しかし、その無の境地よりあらわれた空寂靈知の光明によって、大小有無に分別があらわれ、善悪業報に差別が生じ、言語名相が歴然として、十方世界は掌中の珠のようにはっきりあらわれ、真空妙有の造花は宇宙万有を通じて無始曠劫にわたり、隠顕自在している。これが一圓相の真理である」と記されている。
- (4) 教団の初期に「仏法研究会規約」（1924年、教団統治と教徒の訓練のための教書）、「仏法研

究会統治組団規約」(1931年、教徒の勉強と事業を指導・訓練するための10人1団の組団規約)、「会員須知」(1936年、教理と制度について説明)、「三大要領」(1934年、「六大要領」を縮約したもの)、「六大要領」「修養研究要論」「勤行法」(1939年、圓佛教の基本教理、仏教教理)、「仏教正典」(1943年、小太山が制作した圓佛教の初期教書の集大成版)などを教書として使用してきたが、1962年に『圓佛教教典』を発行。<http://www.won.or.kr/dictionary/index.jsp>の圓佛教用語辞典参照。

- (5) 一圓相(真理・信仰・修行・誓願文・法語)、四恩(天地恩・父母恩・同胞恩・法律恩)、四要(自力養成・智者本位・他子女教育・公道者崇拜)、三学(精神修養・事理研究・作業取捨)、八条(進行四条・捨捐四条)、人生の要道(四恩・四要)、勉強の要道(三学・八条)、四大綱領(正学正行・知恩報恩・仏法活用・無我奉公)。『圓佛教教典<正典・大宗経>』圓佛教中央本部、1975。
- (6) 大宗経は序品、教義品、修行品、人道品、因果品、辨疑品、性理品、仏地品、薦度品、信誠品、要訓品、實示品、教団品、展望品、附属品で構成されている。日本語版『圓佛教教典<正典・大宗経>』圓佛教中央本部、1975。
- (7) 圓佛教の補助経典である。5つの経(金剛般若波羅密経、般若波羅密多心経、四十二章経、賢者五福德経、業報差別経)と3つの語録(修心訣、牧牛十図頌、休休庵坐禅文)。金イルサン『圓佛教理解の第一歩』圓佛教出版社、2001。
- (8) 少太山と9人の弟子が圓佛教創立の精神的基礎を固めるために天地神明に捧げた特別祈禱を「血印祈禱」という。これは、100日間の血印祈禱の際に、9人の弟子が「死無餘恨」と書かれている白紙に名前を書き、朱肉をつけずに捺印したところ、赤い色へと鮮明に染まっていったとされる出来事である。圓佛教用語辞典参照。
- (9) この5ヶ所の聖地については、教団のサイトにある「圓佛教案内」のところに「サイバー聖地巡礼」という項目があり、各聖地の概要・案内・巡礼道などが写真やイラストとともに説明されている。
- (10) 圓佛教新聞は <http://www.wonnews.co.kr/> のサイトでネット会員になると閲覧可能である。
- (11) 1949年創刊された教団の機関誌で日本統治時代の「会報」を継承したものである。定期的に発行したが、1948年8月120号より月刊発行することになった。「圓光」誌の発行のため「圓光社」を設立、教団の各種印刷業務を担当している。圓佛教用語辞典参照。
- (12) 圓佛教軍宗教区のウェブサイト (<http://www.wgunjong.or.kr/>) があり、軍宗教区紹介や後援事業、軍教化便りなどが紹介されている。キム・ナクピル「民族宗教研究の回顧と課題」(キム・ソンレ他『韓国宗教文化研究100年』図書出版青年社、1999)参照。
- (13) * 国民住宅総調査の宗教別人口数

年	全人口	無宗教	仏教	プロテスタント	カトリック	圓佛教
2005	4704万 1434名	2186万5160名 (46.9%)	1072万6463名 (22.8%)	861万6438名 (18.3%)	514万6147名 (10.9%)	12万9907名 (0.3%)
1999比			40万5千人余名増	14万4千人余名減	219万5千人名増	4万4千人余名増加

- (14) <http://www.won.or.kr/wonmaeul/club/0001111/index.html>
- (15) 文化日報(1998. 2.28)に掲載された「系列別新興宗教」の区分表がある。この表には、韓国自生新宗教として、檀君系、水雲系、一夫系、甌山系、奉南系、覺世道系、巫教系、仙道系、儒教系、系統不明、関連団体も含まれている。
- (16) 教団関係者によると、修士・博士学位論文に関しては、ほとんどが教理・思想を中心にした「教理論文」を書き、教務などの聖職者や教職員などは教理・思想についての研究もするが、それをどう活用し、教化へ繋げていこうかという「実践論文」を書く場合が多いという。

國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所年報 第4号

平成23年9月30日 発行

発行者 井上順孝

編集担当 遠藤 潤

塚田穂高

印刷者 日経印刷株式会社

発行所 國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所

東京都渋谷区東4丁目10番28号

郵便番号 150-8440

電話 03-5466-0162

FAX 03-5466-9237